

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520623

研究課題名(和文)大学生英語学習者による補充方略の習得

研究課題名(英文)Changes in Students' use of Communication Strategies

研究代表者

G・M McCrohan (McCrohan, Gerardine)

香川大学・大学教育基盤センター・講師

研究者番号：20448351

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はコミュニケーション方略の明示的指導が学習者の方略使用に与える影響を報告し、彼等の方略使用における変化を観察し、さらに方略使用に対する彼等の自信の変化を報告することをその目的とする。分析の結果3年間の調査期間中により多くの種類のコミュニケーション方略を使用するようになっていくことが明らかになった。しかしながらあるタイプの方略についてはその使用頻度が増えることはなかった。調査参加者はそれらの方略を自信を持って使用することができなかった。また、学習者は、対話者の上下関係に応じて、自分たちの発話言語を切り替えることができず、CSsの練習に合わせて語用論的能力の訓練も必要であることも分かった。

研究成果の概要(英文)：This study examined the effects of explicit teaching of communication strategies on students' strategy use. 298 students participated in this study. The findings indicate that the range of types of CSs used increased for all students during the 16-week courses but that students in the classes that received explicit training showed the highest rates of increase in CSs usage. However, some types of CSs (word coinage and shadowing) did not show a large increase in usage with either group and students did not feel confident using them. It was also found that students did not adapt their language level (level of politeness) depending on the situation and it is believed that students need training in pragmatic competence in conjunction with CSs training.

研究分野：communication strategies, communicative competence

キーワード：communication strategies communicative competence pragmatic competence コミュニケーション方略

## 1. 研究開始当初の背景

授業において、学生達は自分が理解出来ない単語や表現に直面した時にうろたえる傾向がある。これがリーディングやライティングの授業ならば辞書で調べれば良いのだが、会話の授業では、その都度辞書で調べる事により生じる沈黙、気まぐさが生じ好ましくない。故にコミュニケーション方略(CS)がこれらの問題を解決する一つの方法として役に立つのではないかと判断した。コミュニケーション方略は一般に言語知識の不足を補うために使用される方法として定義されており、意図された意味を表現するときに話者が直面する問題を解決する方法である (Konishi & Tarone, 2004。Dörnyei & Scott (1997) は、コミュニケーション方略 (CS) の使用条件および動機について調査し、CS は次の3つの問題のいずれかが存在するときに使用されると結論づけた: 1. 話者の知識不足、例えば、話者の言語レパートリーにギャップがある場合、2. 話者の言語運用、3. 対話者のスピーチ理解における問題。

## 2. 研究の目的

本研究では、2012年から2015年にかけて大学生のCSの使用における変化の観察を行ない、CSに関して明示的指導を受けた学生と一般的なコミュニケーション・ランゲージ・クラスの中でCSに接した学生を比較した。研究課題は下記の通りである。

1. CS において補強訓練の実施は、CS の活用頻度を上げることに繋がるか?
2. 訓練を受けることにより、学生が使用するストラテジーに変化があるのか?

## 3. 研究の方法

1. 補償ストラテジー使用の訓練および実践はコミュニケーション方略をより多く活用することにつながるのか?
2. 訓練によって学生が使用するストラテジーに変化があるのか? 2015年1月までに、合計298人の学生が本研究に参加した。研究に参加した学生は、学生のTOEICスコアおよびCSに関する明示的指導を受けたか、通常のコミュニカティブ英語クラスの中でCSに接したかによって4つのグループに分けられた。

- クラスAおよびB - TOEICスコア範囲 650点 - 900点

- クラスCおよびD - TOEICスコア範囲 350点 - 500点 クラスA (53人) およびクラスC (105人) はコミュニケーション方略に関する明示的指導を受けたのに対し、クラスB (45人) およびD (95人) は、通常のコミュニカティブスタイルのクラスの中でコミュニケーション方略に接した。

データは、学期内に2週目、9週目、最終週 (16週目) の3回同じアンケートを学生に行うことにより収集した。同じアンケートを3回実施することで、学生の特定のCSの使用における変化の追跡調査が可能となった。使用されたアンケートはSato (2002) の翻案であり、クラスに合わせて改訂された。アンケートでは、学生の理解度とターゲットのCSをどれくらいの頻度で使用したかを4つの回答から1つを選択する形で回答してもらった: 1. 知らない、2. 知っているが、使用しない、3. 知っており、ときどき使用する、4. 知っており、よく使用する

上記の選択肢に をすることにより、学生がどのストラテジーを使用する (使用しない) かが明確になり、また、学期を通して学生のCSの使用になんらかの変化が見られるかどうかを観察することができた。

## 4. 研究成果

結果はMarianiの類型論 (Mariani, 2010) に従って3つの大きなセクションに分類された: a. 意味表現ストラテジー、b. 意味交渉ストラテジー、c. 会話管理ストラテジー

結果から、使用されたCSタイプの範囲は16週間の授業を通して全ての学生に対して広がったが、明示的指導を受けたクラスの学生が最も高いCSの使用の増加率を示したことがわかった。

全クラスのほとんどの学生が授業の中でストラテジーを使用していたが、クラスAの学生は、ほとんどのストラテジータイプで使用の増加が見られた。レベルの低いクラスCの学生もストラテジーによっては使用の増加が見られたが、置き換えなどの難易度の高いストラテジーでは増加が見られなかった。良い方向での、または全クラスにおいて顕著な変化が見られたのは、時間を稼ぐために使われるストラテジー、問投詞 (Wow, How awful)、さらなる情報を訊ねるストラテジー (For

example, Like how/who?)、説明を求める  
 ストラテジー (What does "X" mean?,  
 What do you mean?) で、これは全てのク  
 ラスの学生に見られた。以下の表は、CS  
 を受けたクラスAとクラスCの両方の結果  
 を表示している。クラスBとクラスDにお  
 いても、クラスA、クラスCと類似した結  
 果が見られたが、使用頻度は低かった。

**表1. 結果A (1) 意味表現ストラテジー (ク  
 ラスA)**

CSs	A2	A9	A16
近似表現の使用	37	51	77
同義語 / 反意語の 使用	55	66	85
置き換え	0	44	77
婉曲表現	0	19	56

レベルの高いクラス(表1)、置き換えや  
 婉曲表現のようなより難しいスキルは、よ  
 り易しい、あるいは精通しているスキルと  
 同じようには増加しなかった(表1)。特  
 に、婉曲表現については積極的な使用が見  
 られず、ストラテジーを変えたり、日本語  
 に頼ったりすることもよく見られた。レベ  
 ルの低いクラスでは、この傾向はさらに顕  
 著であり、このグループには婉曲表現をス  
 トラテジーとして用いる学生は見られな  
 かった(表2)。

**表2. 結果A (2) 意味表現ストラテジー (ク  
 ラスC)**

CSs	C2	C9	C16
近似表現の使用	0	43	75
同義語 / 反意語 の使用	12	75	100
置き換え	0	12	25
婉曲表現	0	0	0

**表3. 結果B (1) 意味交渉ストラテジー(ク  
 ラスA) \*l= 聴者, s= 話者**

CSs	A2	A9	A16
直接助けを求める	25	66	100
OS に繰り返しを求める	62	76	62
OS にゆっくり話すことを 求める	29	85	85
確認チェック (l-s) *	0	48	74
確認チェック (s-l)	0	68	85
言い換えたり、例を用い てはっきり説明する	0	44	77

\*確認チェック (l-s) には、話者の発話の繰  
 り返し、要約、置き換えなどのテクニッ  
 クを含む。確認チェック (s-l) は一連の固  
 定句。

**表4. 結果B (2) 意味交渉ストラテジー (ク  
 ラスC) \*l= 聴者, s= 話者**

CSs	C2	C9	C16
直接助けを求める	9	81	100
OS に繰り返しを求める	12	81	100
OS にゆっくり話すこと を求める	12	75	100
確認チェック (l-s) *	0	6	12
確認チェック (s-l)	0	25	70
言い換えたり、例を用い てはっきり説明する	0	12	43

表3、4、5、6では、繰り返しを求める、  
 話者にもう少しゆっくり話すように求め  
 る、会話を始める、会話を終わらすなど  
 のために使用される「固定句」がたくさ  
 ん見られた。全てのクラスの学生は、固  
 定句の使用において著しい上達を見せた。  
 過去の研究(Green & Oxford 1995, p.282)  
 では最小の処理のみを必要とするこのよ  
 うなストラテジーが「基本ストラテジー」  
 として作用することが確認されている。  
 本研究の学生のほとんどが、このような  
 「固定句」の使用に関して非常に自信を  
 持っており、これはレベルの低い学生の  
 みによる過去の研究での結果と似ている  
 (McCrohan & Batten 2010)。

**表5. 結果C (1). 会話管理ストラテジ  
 ー(クラスA)**

CSs	A2	A9	A16
会話を始める	50	66	100
会話を終わらせる	18	85	100
次の質問を求める	45	100	100
コメントや感嘆を加える	20	64	80
共感する	11	60	77
シャドーイング	0	30	66
フィラー (Mmm, let me see...) の使用*	0	33	70
既成チャンク (That's a good question. 等)*	7	66	81

**表6. 結果C (2). 会話管理ストラテジ  
 ー(クラスC)**

CSs	C2	C9	C16
会話を始める	5	62	100
会話を終わらせる	5	62	100
次の質問を求める	50	75	95
コメントや感嘆を加える	0	62	83
共感する	6	75	75

シャドーイング	0	12	25
フィルター (Mmm, let me see...) の使用*	0	31	42
既成チャンク (That's a good question. 等)*	0	50	60

要約すると、クラスAの学生はクラスBの学生と比べて「使いやすい」CSをあまり使わず、特に婉曲表現のような「難しいCS」を使う傾向が見られた。どちらのクラスの学生も「造語」を使用することはあまりなかった。レベルの低いクラスCおよびDの結果は、クラスAおよびBほどは明確ではなかった。クラスCの学生は、16週目までの決まり文句の習得がクラスDの学生よりも早かったが、両クラスの学生の大半が決まり文句を使用していた。クラスDでは、クラスCと同じストラテジーの使用が見られ、その使用も増加したが、その程度はクラスCほどではなかった。クラスC、クラスDのどちらのクラスの学生にも、置き換え、要約、造語などのより難しいストラテジーの使用が著し増加は見られなかった。

本研究で直面した問題は次の通りである：1. 日本で使用される伝統的な教授スタイルや評価方法は正確さに注目したものである。これにより、学習者が達成ストラテジーよりも回避ストラテジーを好むことにつながる可能性がある。リスクを冒そうとしないことにより、学習者がコミュニケーション能力を制限してしまうかもしれない。これを克服し、学生にリスクを冒そうと促すことに授業の時間を大幅に割いたため、全ての学生が言語使用において冒険しようとするスタイルに慣れることができなかった。しかしながら、学習者にリスク・テイキングストラテジーの使用を勧めることと学習者の現在の能力に対して要求しすぎないこととのバランスを教師が見出す必要があるであろう。

2. 学生が、状況によって言語レベル（丁寧さレベル）を変化させなかったこともわかった。例えば、学生は教師やクラスのゲストに対して繰り返しを求める時、クラスのパートナーやグループの他のメンバーに話すのと同じストラテジーを使用していた。このことから、学生はCSの訓練だけでなく、語用論的能力における訓練も必要であると考えられる。

## References

- Dornyei, Z., & Scott, M. L. (1997). Communication strategies in a second language: Definitions and taxonomies. *Language Learning*, 47(1), 173-209.
- Green, J. M., & Oxford, R. L. (1995). A closer look at learning strategies, L2 proficiency, and gender. *TESOL Quarterly*, 29(2), 261-297.
- Konishi, K., & Tarone, E. (2004). English constructions used in compensatory strategies: Baseline data for communicative EFL instruction. In D. Boxer & A.D. Cohen (Eds.), *Studying speaking to inform second language learning* (pp. 174-199). Clevedon: Multilingual Matters.
- McCrohan, G., & Batten, P. (2010). Developing students' communicative competence through the use of communicative strategies. *Kagawa Daigaku Kyoiku Kenkyu*, No. 7, pp 99-107, March 2010.
- Mariani, L. 2010. Communication strategies. Learning and teaching how to manage oral interaction. [www.learningpaths.org](http://www.learningpaths.org) Downloaded June 10<sup>th</sup> 2015
- Sato, K. (2002). Practical understandings of CLT and teacher development. In S. J. Savignon (Ed.), *Interpreting Communicative Language Teaching: Contexts and Concerns in Teacher Education* (pp. 41-81). New Haven: Yale University Press.
5. 主な発表論文等
- (雑誌論文) (計2件)
- McCrohan, G. Changes in Students' self-reported use of Communication Strategies 大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要, 11, pp168-178, 2014, 英文, 査読【委嘱論文】
- (学会発表) (計4件)
- McCrohan, G. Improving Students' Communicative Ability: A how to - Teaching Communication Strategies. 全国語学教育学会 (JALT) 松山部 Chapter meeting, 招待講演 02.2015, 松山市, 愛媛大学
- McCrohan, G. Teaching Communication Strategies. The JACET 53rd (2014) International Convention 2014. 8, 広島, 広島市立大学
- McCrohan, G. Changes in Students' self-reported use of Communication strategies.

平成 25 年度 JACET 中国・四国支部  
部秋季研究大会、 大学英語教育学会  
(JACET 中国・四国支部)、高松 (香川大学)、  
2013.10、国内、招待講演、査読有

McCrohan, G Students self-reported use  
of Communication Strategies、 4th Annual  
Shikoku JALT Conference、  
全国語学教育学会 (JALT) 東四国支部・松  
山市部、高松 (香川大学)、2013.05、国内、  
一般講演、査読有、2、英語学

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

Gerardine M. McCrohan,  
香川大学 大学教育基盤センター 講師

研究者番号 20448351

### (2)研究分担者

Paul G. Batten  
香川大学 教育学部 准教授  
研究者番号 70403772